

第一圖版説明

「コイガ」の幼蟲に蝕害されたる
毛布の一部。

(縮小)



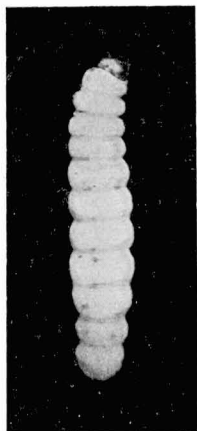
第二圖版説明

コイガ

Tineola biselliella Hump.

1. 成 蟲
2. 卵し黒羅紗に産附せられたる状態ヲ、(略ほ4倍)。
3. 卵を更に廓大して示す。
4. 幼蟲を背面より見たる圖。
5. 蛹を斜め側面より見たる圖。
6. 幼 蟲 の 巢
7. 「コイガ」幼蟲寄生蜂の幼蟲が、「コイガ」幼蟲體より脱出し
て蛹化の途中にある状態を示す、向つて右側の黒褐色となつ
て斃れたのが「コイガ」の幼蟲である。

(凡べて廓大)。



4



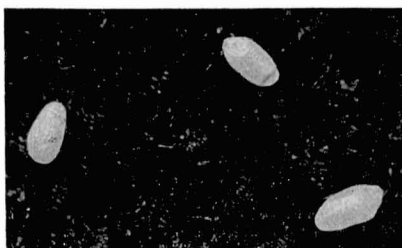
1



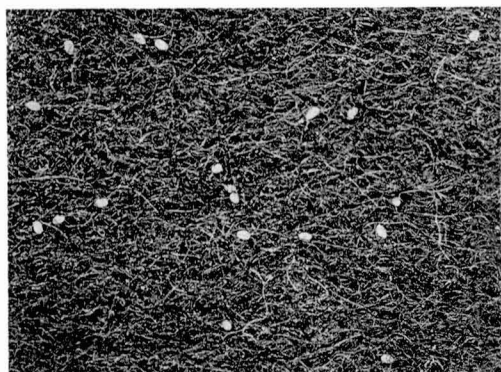
5



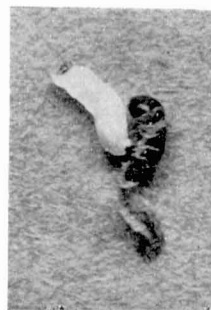
6



3



2

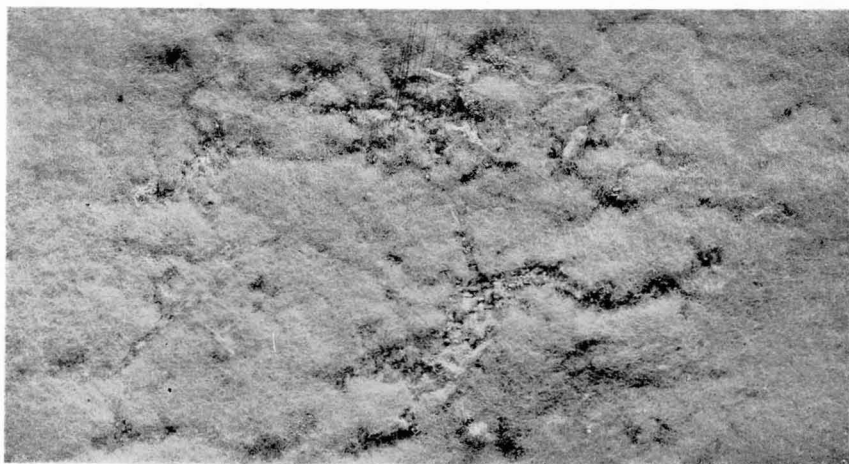


7

第三圖版説明

シロイガ¹幼蟲に蝕害されたるシラクダ²色毛布
被害の三様式。

(1と2は縮小、3は略ぼ實大)。



1



2



3

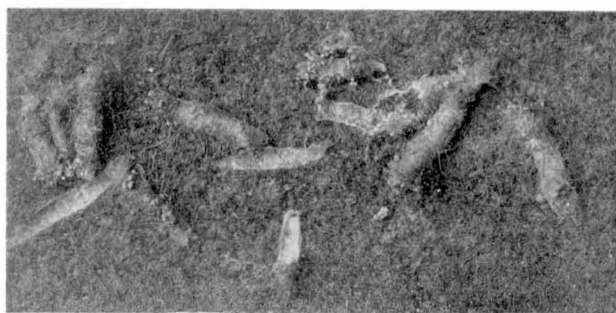
第 四 圖 版 説 明

- 1.「コイガ」幼蟲によつて蝕害裁斷された毛糸。
2. 國防色羅紗の上に造られた「コイガ」幼蟲の巢。
- 3.「コイガ」幼蟲に蝕害された毛糸卷。

(1と3は縮小、2は少しく膨大)。



1



2



3

Y. Yamada & K. Matsuo Photo.

「コイガ」の生活史に就て

山 田 保 治

學名、*Tincola biselliella* Hump.

異名と方言、ヒメキヌホソバ、毛綴蛾、

分類學上の位置、鱗翅目 Lepidoptera.

コクガ科 Tineidae

(圖版一・二・三・四参照)

一、分 布

世界共通種として知られ、本邦に於ける詳細なる分布に就ては、未だ充分 わかつて居ないが、關西地方では最も普通に産して居る。

二、形 態

成 蟲

全體光澤ある淡灰黄色の小蛾であるが、頭部の鱗毛は叢狀で黄褐色を帶び、觸角は糸狀で細長く、複眼は圓くて大きく黑色、翅は前後共に細長く、後翅は前翅より其色彩淡くて黄白色、兩翅共に縁毛長し、靜止のときは翅を屋背狀に疊む、此種は「コイガ」と稱へらるれども、個體によりて「イガ」より大形のものがある、體長 5 乃至 6「ミリメートル」翅の開張 10「ミリメートル」内外。

卵

長橢圓形で表面に不規則な皺がある、淡黄色を帶むだ白色であるが、多少眞珠様の光澤を持つて居る、卵の長經 0.5「ミリメートル」。

幼 蟲

孵化當時の幼蟲の頭部は大きくて光澤ある黄褐色、胴部は黄白色で細長くて頭部より其幅狭く全體に灰白色の細毛を散生して居る、體長 1「ミリメートル」。

幼蟲の充分成熟せるものは、頭部は光澤ある黄褐色で、其兩側に各一個の一文字狀黑褐色紋がある、胴部は光澤ある淡灰黄白色で、別に斑紋はないが、食物の透視せらるることによつ

て、幾分種々の色彩を現はすことがある、胸脚端の爪と腹脚及び尾脚端の鈎毛は黄褐色で、全體に灰白色の細毛を散生して居る。體長6乃至7[ミリメートル]。

幼 蟲 の 巢

幼蟲は之れが食物とする、毛布、羅紗、其他の毛織物を、吐糸で綴り合せて巢を造る、巢の色彩は幼蟲の加害せる物によつて異なる、即ち赤毛布に生活せるものは赤色の巢を、黒羅紗を加害せるものは黒色の巢を造る、巢の形は圓筒狀で兩端多少圓味を帶び、[イガ]幼蟲の巢の如く裁斷狀でない、成熟幼蟲の巢の長さは11乃至12[ミリメートル]。

蛹

體は細長く、光澤ある淡黄灰褐色であるが、複眼と體の背面は色彩濃く、體の腹面は淡色で全體に灰白色の細毛を散生して居る。觸角は非常に長く脚端と共に腹部第七節端近くまで達し、翅は之れより遙かに短かく腹部第五節端近くに達す、觸角、翅、脚、の各末端は體から遊離して居る、腹部背面の第二節から第七節に到る基部と、第八節の間には褐色刺毛列生し、前者の刺毛は後方に向へども、後者の刺毛は直立す、而して第二節に生ぜる刺毛の数は他のものより遙かに少なく、個體によつて判然しないものもある、腹部末節端は鈍頭狀で、其左右に各一個の褐色刺が生へて居る、體長5[ミリメートル]内外。

三、生 活 史

經過は表示せるが如く一年二回の發生で、冬は幼蟲の狀態で巢の中で越冬し、翌春四月下旬頃から蛹化する、蛹化は幼蟲時代の巢の中でなすために、其期日を確認すること困難であるが、蛹の期間は略ほ二週間位と思はれる、蛹は羽化前になると、蛹體の半ばを巢から脱出して羽化する、第一回の蛾の出現は五月上旬頃からである、蛾は趨光性がある、従つて夜間燈火に集まつて来る、交尾を終つた雌蟲は、毛布、羅紗、毛糸、等の毛の間に一個づゝ卵を産み付けて置く、卵産附の狀態は、横位なるもの、斜なるもの、縦に差込まれたるが如きもの、直立せるが如きものなどもあつて、全く一様でない。一雌の總産卵數に就ては未だ詳細な調査を缺くが、觀察した二匹の雌の中で一匹は14個、他の一匹は15個を産むだ。卵は二週間位すると孵化して幼蟲となる、幼蟲は間もなく蝕害を始め、成長と共に吐糸を以て、嚙み切つた糸を綴り合せて圓筒形の巢を造り、此中に生活しながら加害を逞しくするのである。

幼蟲の加害は始め糸を蝕ひ、次第に毛織物の地を犯して遂には穴を穿ち、實用價值を無くしてしまふ。而して清淨なものよりも、手垢のついた汚れた物の方が、遙かに被害の甚だしきこ

「コイガ」の経過表

月 年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
I				⊙	⊙⊙⊙ +++ ...	⊙⊙ +++ ...		⊙⊙ +++ ...	⊙⊙⊙ +++ ...	⊙⊙⊙ +++ ...		

記 號 説 明、 + 成蟲、 ・ 卵、 - 幼蟲、 ⊙ 蛹で巢の中にあるもの、 下方の斜線幼蟲加害時期

と、又毛布などが疊まれてある場合、其折れ目は然らざる部分よりも被害の多い傾向のあること等は、「ヒメマルカツラブシムシ」の幼蟲に於けると同様である。

羅紗の様な織の比較的密なもので、蚕の短かいものの上に造られた巢は、吐糸で之れに附着（第四圖版 2）せられ、毛布の様な蚕の非常に長いものに加害せるものでは、被害の跡は溝或は穴の様な状態となつて、巢は其溝或は穴に横へられ、羅紗に加害せるものの様に巢を毛布に綴附けない、幼蟲は巢の中に生活すれども、「イガ」幼蟲の如く巢を背負ひながら移動することは殆んど見られない。

斯様にして七月中旬頃になると、幼蟲は殆んど成熟する、大きくなりきつた幼蟲は巢の中で蛹となる、蛹の期間は十日乃至二週間位で、羽化前に蛹體の半ばを巢外に脱出することは、既に前に述べた、第二回の蛾の出現は八月上中旬頃からで、羽化した蛾は間もなく交尾して卵を産み、孵化した幼蟲は再び加害を始め、成長と共に巢を造り、十一月上旬頃に到れば温度の下降と共に、活動を中止して、幼蟲のまま巢の中で越冬して、又繁殖加害を繰り返すのである。

四、被 害

幼蟲が主として加害するのは、毛布、羅紗、毛氈、毛糸、「モスリン」の類であるが、中でも毛布は特に被害が甚だしい、而して鯉節、乾魚類、に加害することは殆んど見られない。

五、「コイガ」幼蟲の寄生蜂

昭和十三年五月二十七日「コイガ」幼蟲を飼育して居るものの中に、一匹の不活潑な幼蟲を認めたので、之を別の容器に入れて置いた處、同年五月三十日に到つて、寄生蜂の幼蟲が一匹「コイガ」幼蟲の皮膚を蝕ひ破つて脱出した、其幼蟲は全體淡黄白色で、體長 2「ミリメートル」あつた、此幼蟲は暫らくすると吐糸を以て白色の不完全な薄い繭を造つて、同年六月二日蛹化

のために脱皮を始めたが、脱皮は其半ばで停止、遂に其儘斃れてしまつた、斯のために種名の推定は出来なかつた、寄生蜂の幼蟲が脱出すると、宿主である「コイガ」幼蟲の體は次第に乾枯びた様になつて斃れてしまつた。此寄生蜂は宿主一匹に對して一匹寄生して居た。(附圖寫眞は繭から取り出して、蛹化のため脱皮の途中にあるものを寫したのである)。

記載を終るに當つて鳥野彌藏氏が、研究材料の聚集に一方ならぬ便宜を與へられたる厚意に對しては衷心感謝の意を表する次第である、尙ほ又松尾薰四郎氏より寫眞につきて多大なる助力を得たることは、余の深く感銘する處である。

「コイガ」に關する文獻

1. 松村 松年 日本害蟲編、490—492頁、〔明治三十二年〕1899.
2. “ 大日本害蟲全書前編、149頁、〔明治四十三年〕1910.
3. 磯部 辰雄 毛類製品の貯藏と其害蟲、科學知識、第四卷第四號 37—38頁、〔大正十三年〕1924.
4. 山田 廣 毛織物の害蟲豫防法の話、化學工藝、第十二卷第七號 16—29頁、〔昭和三年〕1928.
5. 名和 梅吉 害蟲防除寶典、64—65頁、〔昭和四年〕1929.
6. 北 隆 館 應用動物圖鑑、509頁、〔昭和五年〕1930.
7. 丸毛 信勝 實用昆蟲學、430—431頁、〔昭和六年〕1931.
8. 松村 松年 大日本害蟲圖説、358頁、〔昭和七年〕1932.
9. 岩田 勇三 毛類製品の害蟲と其驅除法(一)、科學工業第八卷第七號22—23頁〔昭和八年〕1933.
10. 桑名伊之吉 新編家庭の害蟲と其防除、110—111頁、〔昭和九年〕1934.
11. 陸軍被服本廠 毛織物の害蟲と其防除方法、發行年月不詳。 [終り]